教育長だより　No. 12

２０２２年７月８日

赤チョークは使うな！

今、人事評価にかかる管理職の教育長面談を行っています。そのなかで興味深いことを聞きましたので、みなさんにお知らせします。それは「色覚」に関するもので、篠原小の細谷校長先生から聞きました。色の見え方に「課題」がある人が普段どんなふうにものを見ているのかがわかるアプリがあるとのこと。これは、同校のコーディネーター加配の先生から聞かれたそうです。その**アプリは『色のシュミレータ』**という名前です。（ https://asada.website/cvsimulator/j/ ）カメラ機能のようにこれを通して赤や緑のものを見ると、その色が消えてグレーや黄色っぽく見えました。「ああ、こんな風に見えるのか！」と私も驚きました。なお、先日の養教部会の研修でも紹介されています。みなさんにぜひ見てほしいです。

この色覚に関わって私が数年前に「ほほえみ通信」で書いたものがあります。以下に再度紹介します。

2011年11月の京都新聞に、『カラー(色の)ユニバーサルデザインを考える』という特集記事がありました。ユニバーサルデザインという言葉は、ご承知のように「男女や年齢、あるいは障がいのあるなしなど、一人ひとり違った個性を持つすべての人が生活しやすい環境にしていこう。」という考え方です。そして、その一環で、ものを見るとき、だれもが楽に見分けられるように色づかいやデザインを考え、多くの人に情報がきちんと伝わるようにする動き＝「カラーユニバーサルデザイン」が広まってきています。（これも人権の一つなんですよ。）

人は、ものの形を見ると同時に色からも多くの情報を得ています。人間は光のセンサーと言える視細胞(しさいぼう)で光の強さや色(波長)を感じています。明るいときには、赤・緑・青のセンサーが働き、色を識別しています。しかし、だれにでも同じように見えているのではありません。ある人には見分けやすい色も、似たような色に見えてしまう人がいます。３種類のセンサーのうちの一つが弱かったり他のセンサーと似ていたり、あるいは一つのセンサーだけが非常に敏感だったりすると色の見え方が違ってきます。昔は「色弱」とか「色覚障害」と呼んでいましたが、血液型の区別と同じようにどれが正常というわけではなく、タイプによる違いと言えます。そして、中でも赤色の「色弱」の人は、日本人の場合、男性で２０人に１人、女性で５００人に１人の割合と言われています。ですから、学校ではだいたいクラスに一人「色弱」の子がいるということになります。※実験→いろんな色の線を引いて、その上に赤いセロハンをのせて見ると、いくつか見えにくい線があることに気づくと思います。（大学の入試勉強で答えを隠すのにこれをやった人も・・・。）

さて、今も学校では黒板中心の授業が多いですよね。その黒板では、一般的に色弱の人は赤い字と青い字の区別がつきにくく、どちらも青っぽく見えると言われています。人によりますが、赤色は黒と認識する人もいます。また、黄色と緑の字も同じように黄色っぽく見えるとのこと。（先ほど書いたように「個性」ですから、この見え方も本当はいろいろなんです。センサーの鋭さの強弱もありますから。今回は、ごくおおざっぱに言いましたが・・。） ですから、**茶色や青などのカラフルなチョークで黒板に書くというのは、実は色弱の人を大混乱させることになっています。**（最近の赤は大分改良されましたが・・）

私は、新任（大阪の中学校）の頃、先輩から「赤のチョークは使(つこ)たらあかんで。」と言われたの

を覚えています。（なぜかは忘れていましたが・・）以来、白と黄色だけで授業をしてきました。
私は中学校の社会科教員なので、この２色だけで地図を書いたり地図に ○○ ×× ////// など
のマークで区別したり、また、大事な板書事項には波線（なみせん）や二重線などの工夫をしていました。
　私は３８歳で大阪から滋賀（近江八幡）に異動し、まもなく市教委（学校教育課）の指導主事へと転勤しました。あるとき学校訪問をするにあたり、このこと（赤チョーク）が気になりました。そこで県教委に聞いてみましたが、明確な回答はもらえませんでした。そこで、「意を決して」文科省に電話したんです。そうしたら、実にていねいな対応をしてくださいました。そして、担当者から「もう３０年以上も前に、そういう関係の資料を各学校に配布しています。」との回答です。（私はびっくりしました。）その資料が手元になかったので、一部送ってもらいました。その冊子には私が先に書いたようなことが載っていたのです。また、板書の工夫の仕方もていねいに載っていました。（平成元年３月に当時の「文部省」が発行した冊子『色覚問題に関する指導の手引き』：これは改訂版です。）
　このことは、今は**文科省の『色覚に関する指導の資料』として改訂・公開**されています。重要な内容ですので、ネットをご覧ください。このタイトル名だけで検索できます。